

連載 千座の置き戸（ちくらのおきど）

第二百四十二回 真正護憲論のあゆみ（その三十二）

南出喜久治（令和6年4月15日記す）

かがみにて なほまがあかし ききさばき たまでつつみて つるぎでわかつ
(鏡にて直禍明かし效裁き(真正護憲論)勾玉で包みて(講和條約説)剣で辨つ(無効宣言、破棄通告)

なぜ、このやうなことになつたのでせうか。それは、G H Qが、戦前の日本が強かつたのは教育制度、とりわけ学校教育においては、教練と体罰が存在することにより、組織力と精神力の強化が図られてゐると捉へてゐたからです。

戦前にも体罰禁止の規定がありました、それは完全に形骸化してゐたからです。

日本軍の完全武装解除と民主化教育なるものによつて教練の必要もなくなつて自然消滅するでせうが、体罰は自然消滅しないと考へたG H Qは、教師の懲戒権から体罰を締め出したのです。

つまり、学校教育における体罰禁止条項は、憲法における戦力不所持条項（第9条第2項前段）と相似してゐます。体罰を用ゐたり、戦力を行使したりすることは、できる限り避けなければなりませんが、その備へと権利がなければ、学校や国際関係での秩序が保てません。体罰の行使が許容され、戦力の備はつてゐるがゆゑに、それによる抑止力が働いて秩序が保たれるといふ効果があり、その効果は極めて有用です。また、これに代はつて、このやうな効果をもたらすものは、残念ながら他にはありません。

にもかかはらず、無条件で体罰を禁止し、その監視制度としてPTA組織などを作らせ、体罰禁止の形骸化を阻止したのです。

これにより、武装解除条項と同様、教育を崩壊させ、日本を弱体化するためのG H Qの政策を推進させたのです。それゆゑ、この体罰禁止条項が「教育における武装解除条項」と呼ばれる所以がここにあります。

そのため、教師は児童・生徒から舐められ、逆に暴力を振るはれても、追ひかけまはされても教師は手も足も出せず、児童・生徒に手を出せば失職するといふ教師の強迫観念が教育への情熱を失はせて精神的に萎縮させ、これが悪循環となつて今日の学校が荒廃し続ける原因なのです。

学級崩壊といふ事態も、教師の体罰禁止が生んだ悲劇です。児童・生徒を叱責すれば反抗され、体罰が禁止されてゐることから叱責した教師に対して危害を加へてくるので、教師としては教室がそれによつて混乱することを回避しやうとして放置するため、乱暴狼藉を働く児童・生徒のなすがままになつて学級崩壊に至ります。

最近では、そのやうな極端な暴力的事態はなくなりましたが、その反面において、いじめが潜在化します。生徒同士のいじめがあることを教師が知れば、それを止めさせることが教師として務めです。

ところが、それをすれば、いじめをする児童・生徒から教師を突き上げます。体罰禁止を逆手に取つてきます。さうなると、教師は見て見ぬふりをします。いじめられてゐる児童・生徒は、教師がいじめのことについて無関心になつてゐるために教師に打ち明けても無理だと諦め、教師に頼ることができず、そのことを親に言ふと親に心配をかけることになるので一人で抱へ込んでしまひます。そして、自殺に至るといふ悲劇的な事態が生まれます。

そして、校長や教育委員会が、いじめの事実を知らなかつた言ひ訳をして頭をさげて謝るといふ恒例行事の光景が繰り返されるのです。

これも、G H Qが仕組んだ日本弱体化政策、日本社会の崩壊促進政策による成果と言へるものです。

日本政府は、過去に、「人の命は地球よりも重い」といふ馬鹿げた言葉を吐いて、テロに屈し超法規的措置として犯罪者を釈放したり、ペルーの人質事件でも「人命尊重」を唱へて無為無策に終始したことがありました。このやうに何が何でも「命の大切さ」を教へることが人権教育、平和教育と呼ばれてゐます。これは、現代人権論と同じ系譜に属する教育思想に基づいてゐます。ところが、この人権教育や平和教育がすでに教育の現場では破綻し、教室は荒廃し続けてゐるのです。

その原因は、「命の大切さ」のみを教へ続けることがあります。自己の個体の命が一番大事であり、それを超える大切なものがあることを考へさせることすらしない教育をし続けてゐるからです。

動物の世界でも、親は、子を救ふため自らの体を差し出します。肉食動物に襲はれて逃げられなくなつた親子の草食動物は、親が襲ひ掛かる肉食動物の囮となつて子を助けます。

これと同じやうに、個体は、社会や国家、そして地球に属してゐるものですから、その帰属してゐる全体を守るため個体が犠牲になることがあることを教へなければなりません。むしろ、自己を育み、そしてこれから子孫を守り続ける家族や郷土、そして祖国や地球を

守るために必要とあらば、みずからの命をも差し出すことの信念と誇りこそが真の命であることを教へなければなりません。守るべきものは、我々の共同体の生命総体、すなはち「総命（すめらみこと）」なのです。

ところで、先ほどの「人の命は地球よりも重い」といふ言葉にはマヤカシがあります。人の命と地球との重さを比べることはできないといふ、単なる揚げ足取りを言ふつもりはありません。この「重い」といふ言葉は、本来は「尊い」といふ言葉を使ふつもりだつたと思ひます。しかし、本当にそのやうに置き換へたとき、逆の結論になつたはずです。つまり、「地球は人の命よりも尊い」とすることに誰も疑問はないはずです。固体の生命（私）は全体の生命（公）を超えることはありません。固体の命が絶対的な価値を持つてゐるのなら、この世の中に、死刑といふ刑罰が存在し、自殺未遂が罰せられないことをどう説明するのですか。固体の命を減してまで守るべき価値があるものが存在してゐるからです。

「命は義に縁りて軽し」とか、「命は鴻毛より軽し」とかの言葉は、大義のために捨てられる命の尊さを教へたものです。教育勅語には、「一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ」とあり、まさにこのことが説かれてゐるのです。